慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	切韻の韻序について
Sub Title	The order of rimes in "Qie-Yun"
Author	遠藤, 光暁(Endo, Mitsuaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.299(118)- 312(105)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0312

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

切韻の韻序について

遠藤　光暁

一

今世紀になって切韻系韻書の唐代の諸本が敦煌や故宮で発見されるに及び，それまで宋の『広韻』を通してしか知られなかった陸法言『切韻』の原貌がかなり明らかとなってきた。まず，大韻の数は『広韻』が206韻なのに対し，『切韻』は193韻であったと考えられる。また大韻の配列順は『広韻』の韻序を基準として言うと，唐代の切韻系韻書の主流では，1）覃談韻が豪韻の後・陽韻の前に置かれ，2）蒸登韻が添韻の後・咸韻の前に置かれ（以上は相配する上去声も同じ），3）入声が薛韻より後・業韻より前で平上去声と韻鏡流の四声相配をしない，といった違いがある。ここで完本王韻によって平声韻の具体例を見ると「東冬鐘江支脂之微魚虞模齊佳皆灰咍真臻文殷元魂痕寒刪山先仙蕭宵肴豪歌麻覃談陽唐庚耕清青尤侯幽侵塩添蒸登咸銜嚴凡」という順序になっている。陸法言『切韻』の韻序もこのようであった公算が高い。この順序がいかなる秩序に従っているかを見出すのが本稿の主題である。

私の知るかぎり，これまで魏建功・頼惟勤・尾崎雄二郎の諸氏が同じ主題について論じておられるので，まずそれらの説を検討しておきたいと思う。

魏建功氏は，『広韻』に基づき，ほぼ摂に相当する韻のグループ内において韻目字の声母が敦煌所出の「帰三十字母例」（S512）の字母の順になるように韻が配列されているとした[1]。しかし，この説では摂内の韻の配列のみが問題となっており，なぜ諸摂が通江止遇蟹……という順に配列されているかの説明になっていない。また，S512はもとより、三十字母自体の成立年代が『切韻』よりも後だと推定されることから，もし両者に因果関係があったとしても，この三十字母の方が『切韻』を参考したという方向になるであろう。ほか，S512の字母の配列順の見方にも問題がある[2]。

次に頼惟勤氏によると，『広韻』の韻序は韻尾がuŋ，i，ゼロ，i，n，u，ゼロ，ŋ，u，mの順となっており，同じ韻尾が2か所に分散するのは（校訂された）内外転を基準にしている，という[3]。更に，『切韻』では麻韻の後の部分から中古韻尾の異質のものが混じり，また入声も（韻鏡流の）相配をしないので，m，ŋ，p，kなどの韻尾が全部か一部，本来の面目を失っていた可能性を示唆している。しかし，この説によっても，uŋ，i，ゼロ…という順がいかなる意味をもつかは依然として不明である。

尾崎雄二郎氏は，『広韻』が「東冬鐘江」とŋ韻尾に始まり，「侵…凡」とm韻尾に終わることから，その中間は喉の奥から唇に至る順序になっているとする基本的な着想を元にし，微に入り細を穿った論を提出している[4]。ここで，「喉の奥から唇に至る順序」とは梵字の排列原理であり，『切韻』の韻序に悉曇学の投影を見る点に関しては私も賛成する者である。ただし，随所で通説とかなり違う音価が想定されており，韻序を説明するためにこれほどの代価を払わねばならないかは疑問である。例えば，覃談韻が果仮摂の後・宕摂の前に置かれる点は『切韻』の韻序を考える上で一つの山場だと思うが，切韻音の音価の方を修正してm韻尾の調音が不完全であったと見做すと，かえって問題解決のカギを失うことになろう。

では，韻序に合わせて切韻音を修正することなく，その配列原理を説明する道は他にないであろうか。

二

安然の『悉曇蔵』巻二に唐代の韻書である『韻詮』が引かれている[5]。それには，「又如真旦韻詮五十韻頭，今於天竺悉曇十六韻頭皆悉摂尽，更無遺余。以彼羅家摂此阿阿引，以彼支之微摂此伊伊引，以彼魚虞模摂此烏烏引，以彼佳斉皆栘灰咍摂此翳愛，以彼蕭霄周幽侯肴豪摂此汚奥，以彼東冬江鐘陽唐京争青清蒸登春臻文魂元先仙山寒琴岑覃談咸厳添塩及以諸入声字摂此暗悪。…」（また中国の『韻詮』の五十韻頭は，インドの悉曇［韻母］の十六の韻頭にことごとく包摂されて，あますところがない。かの［『韻詮』の］羅・家韻によって，こちらの［悉曇の］a・āを代表し，……，かの東…塩韻および諸入声字によってこちらのaṃ・aḥを代表する。）とある。

『韻詮』の撰者・武玄之は，大矢透氏の考証によると唐・高宗（650－683）の頃の人である[6]。上の韻目を見ると『切韻』と基本的には一致するが，分韻や韻目名が異なる場合がある。また，この韻序は『切韻』とはかなり異なるものの，一致する点も少なくない。冒頭に通江摂の代わりに果仮摂のある点，流摂が效摂の間に入っている点，陽声韻・入声韻の位置などは『切韻』と全く異なる。しかし，止摂の後に遇摂，その後に蟹摂，（臻摂・山摂をぬかして）その後に效摂が置かれる点は『切韻』と一致する。

ところで，この韻序は『韻詮』の元のままである保障はない。『悉曇蔵』のこの箇所の主旨は中国語の韻と梵語の摩多の引き当てにあり，『韻詮』の元の韻序とは拘りなく梵語の摩多の順に並べかえて引用した可能性があるからである。すると，『切韻』の韻序の『韻詮』との合致はより根源的には梵字の摩多との一致だということになる。この啓示から，『切韻』の韻序を梵字の摩多の順・a, ā, i, ī, u, ū, e, ai, o, au, aṃ, aḥ に照らして見ると，次のようになる：

東冬鐘江	支脂之微	魚虞模	斉佳皆灰咍	真臻文殷元魂痕	
?	i ī	u ū	e ai	?	
寒刪山先仙	蕭宵肴豪	歌麻	覃談	陽唐	
?	o au	(a ā)	aṃ	aḥ	
庚耕清青	尤侯幽	侵塩添	蒸登	咸銜厳凡	
?	?	?	?	?	

この結果，『切韻』の方が梵字の摩多の順と一層よく合致することがわかる。殊に，不可解とされてきた覃談韻の位置は，かえって梵字の摩多との一致を示す決め手となるであろう。更に，その後に陽唐韻が来ることは，それらに相配する入声・薬鐸韻が梵語のａｈ̣に相当するのであるから，まさに場所を得ていることになる。

ここで問題となるのは，①冒頭に東冬鐘江韻が置かれ，その位置に来るべき歌麻韻が效摂の後に置かれている；②蟹摂と效摂の間に臻摂と山摂が挿入されている；③庚韻以下の説明になっていない，などの諸点である。

②の疑問に答えるのは比較的容易である。臻摂と山摂はn韻尾をもっていたと推定され，前舌韻尾をもつ点で蟹摂と類似するためその後に置かれたものであろう。①の問題については次の第三節で論ずる。③については，『切韻』は一枚岩ではなく，前三分の二ほどの韻序はある底本に従い，その残りは他の先行韻書に基づいたと見做すことによって説明できるものと考える。『切韻』をこのように二つの部分に分離するにあたっては，もう一つ根拠がある。それは，入声が丁度このあたりからそれ以前の部分のような四声相配をしなくなることである。この問題については第四節で改めて論じよう。

三

『切韻』は平上去入の四声説に基づいて編纂されている。この四声は梁の沈約らの命名によるもので，それ以前は音階名の「宮商角徵羽」を声調名に転用していたと考えられる(7)。韻書の鼻祖である李登の『声類』や呂静の『韻集』などはこの五声説によっている。その「五声」とは何かについては，まず，唐の封演の『封氏聞見記』「文字」の項に「魏時有李登者，撰声類十巻，凡一万一千五百二十字，以五声命字，不立諸部(8)。」（魏に李登という人が『声類』十巻，全11520字を編んだが，五声によって字を命名し［各字を五声に分類したという意味か］，部首を立てていない）とある。これだけでは「五声」が何を指すかは明らかでないが，『魏書』「江式伝」に「（呂）忱弟静，別放故左校令李登声類之法，作韻集五巻，宮商緑徵羽各為一篇，…」（［呂］忱の弟である静は［兄の『字林』とは］別に故左校令・李登の『声類』の様式にならって『韻集』五巻を作ったが，宮商角徵羽がそれぞれ一巻となっている）とあり，「宮商角徵羽」の五声であることがわかる。更に，空海の『文鏡秘府論』天巻には(9)「斉太子舎人李節，知音之士，撰音譜決疑。其序云：“案周礼，凡楽，圜鐘為宮，黄鐘為角，大蔟為徵，沽洗為羽。商不可合律，蓋与宮同声也。五行則火土同位，五音則宮商同律。闇与理合，不其然乎？呂静之撰韻集，分取無方；王微之製鴻宝，詠歌少験。平上去入，出行閭里，沈約取以和声之律呂相合。竊謂宮商徵羽角即四声也。羽，読如括羽之羽。亦之和同，以拉群音，無所不尽。豈其蔵埋

万古，而未改於先悟者乎？”」（斉の太子舎人・李節は，音韻をわきまえた人で，『音譜決疑』を著わしている。その序にいう，“『周礼』によると，楽律というものは圜鐘が宮，黄鐘が角，大蔟が徵，沽洗が羽なのである。商が音律に入っていないのは宮と同じ音であるためであろう。五行では火と土は同位であり，五音では宮と商は同律なのである。“暗に理にかなう”とはこういうことではあるまいか。呂静は『韻集』を編んだが，分韻の取捨がいいかげんで，王微は『鴻宝』を作ったが，作詩に役にたたない。平上去入は巷で行われていたが，沈約がそれを和声［韻文を作ることか？］の音律に適合するものとした。私の考えでは，宮商徵羽角とは四声に他ならない。“羽”は“括羽”（矢にやじりをつけ，羽を植える）の“羽”［去声］に発音する。［“亦之”から“不尽”までの意味は不明］これは久しく埋もれたままになっていて，先覚者によって改修されていないことではなかろうか。”）とある。李節とは李季節，または李概のことで，『音譜決疑』とは『切韻』「序」で言及されている李季節『音譜』と同一書であろうと考えられる。これは五声説でいう宮商／徵／羽／角が四声説の平／上／去／入にそれぞれ相当することを述べたものである。呂静『韻集』なども目睹しつつ韻書を編んだ人として，李季節のこの意見は相当の信憑性があるものと認められる。

更に，唐の徐景安『楽書』には「凡宮為上平，商為下平，角為入，祉為上，羽為去。」とあり[10]，宮は上平，商は下平に相当するものとしている。

通説によると，『切韻』で平声が上平と下平の二巻に分けられている[11]のは，単に平声の字数が多いためで他の意味はないとされている。確かに，平声字が上去入の各声調に比べ2倍程度あること，上平も下平も声調としては同じ平声であることは事実である。しかし，ここで“宮”という字が上平の東韻に含まれていること，“商”という字が下平の陽韻に入ることからすると，宮と商の違いは韻母にあり[12]，徐景安の言う如く『切韻』の上平と下平の区別は五声説の韻書における宮と商の違いを承けたものである可能性がある。そうすると，梵字の摩多に照らすと異質的な部分である冒頭の東冬鐘江韻は別系統の先行韻書に基づいて韻序が定められたことにな

ろう。その所拠韻書は，陸法言が『切韻』を編纂する際に参照したことが確実な五つの先行韻書のうちただ一つ五声説によっている呂静の『韻集』に限定される。

その場合，『切韻』で“宮”という字が韻目になっているわけでもなく，特別の扱いをされていないことが問題となる。しかし，陸法言は『切韻』を編む際に韻目代表字を調整したことが様々な証拠からわかり，先行韻書の韻目名がそのまま『切韻』の韻目名となっているとは限らない。“東”は日の出る方で，五行で木，四時で春に配当され，万物が始めて動き生ずる方位であり，開巻劈頭を飾るのにふさわしい字である。陸法言は，『説文解字』が“一”で始まり“亥”で終わるように，『切韻』を“東”で始めたかったために冒頭でわざわざ別の系統——呂静の『韻集』——の韻序を採用したのではなかったか(13)。

なお，まだ声調に対する適切な用語がない時代には，出来あいの音階名を声調名に流用して，実際には四つしかない声調に五つの音名を無理に配当することになったのも無理からぬことである。押韻基準としての実用上の目的から見ると，脚韻だけが問題になっている限りは，これはこれで不都合がない。どのみち韻母が違えば同じ平声であっても押韻しあうことはないのだから，一つの平声を韻母に従って二つに分けても混乱は生じないのである。しかし，沈約らは句中においても声調を整えることを主張した。この場合，声調として同じ範疇は一つに合併しておく必要があるため，宮と商を平の一つにまとめたのであろう。四声説の提唱は近体詩の確立と表裏一体をなすものと考える。そして，いったん近体詩というスタイルが主流となると，五声説に基づく韻書は不便なため，顧みられなくなるに違いない。そのため五声説と四声説の対応関係も埋もれてしまい，李季節が改めて指摘しなければならないほどになったのであろう(14)。

四

入声は薛韻まではほぼ整然と平上去声と四声相配するが，それ以後の韻ではその関係が乱れる。ここで，『切韻』の入声の順序を組み替えて『韻鏡』や『広韻』流に平声と相配させると次のようになる（入声には通し番号を付す）：

東冬鐘江支脂之微魚虞模斉佳皆灰咍真臻文殷元魂痕

1 2 3 4　　5 6 7 8 9 10

屋沃燭覚　　質櫛物迄月没

寒刪山先仙蕭霄肴豪歌麻

11 12 13 14 15

末黠曷屑薛

覃談陽唐庚耕清青尤侯幽侵塩添蒸登咸銜厳凡

20 21 27 28 19 18 17 16　　26 24 25 29 30 22 23 31 32

合盍薬鐸陌麦昔錫　　緝葉怗職徳洽狎業乏

このように配列すると薛韻より後から業韻より前まではほとんど無秩序であるかに見え，入声韻尾がこれらの韻では弱化していたとする説も出てくるわけである。

ところで，『切韻』の韻目は相配する四声が同じ声母になるように選ばれる傾向がある。「江講絳覚」などはその好例である。「東董送屋」のように不完全な場合もあるが，そういう場合は隣接する韻が同じ声母構成になって「冬　宋沃」となっていることが多い(15)。薛韻以前は平上去声と相配する順になっているのは無論のこと，韻目の声母も概ね合せられている。屋沃迄没末黠曷は平上去声と声母が異なるけれども，入声韻同士で同声母に合わせられた韻の対（屋沃，没末，黠曷）は相配する平上去声も声母を合せてある（東冬，魂痕・寒，刪山）。さて，問題の薛韻より後の入声韻は，韻序こそ平上去声と並行しないものの，やはり同様に韻目の声母が相配する平上去声と同じに揃えられていることが多い。薬鐸緝葉怗職徳洽狎業乏などは正にそうであり，合盍，陌麦，昔錫は相配する平上去声も覃談，庚耕，清青のように対になっている。これに基づくならば，薛韻より後の入声韻も『韻鏡』『広韻』流に相配させた平上去声と同部位の閉鎖音韻尾を持っていたとすべきである。

それでは，入声が薛韻より後でこのような配列になっているのは何故であろうか。

現在では四声相配とは同介音・同主母音で韻尾の調音点が同じ陽声と入声の間の関係と理解されているが，これは『韻鏡』に至って確立した概念であって，そもそもは陰声もこれに与かっていたのである。すなわち，空海『文鏡秘府論』天巻に引かれる『調四声譜』によると，“平上去入配四方：東方平声平伻病別，南方上声常上尚杓，西方去声袪麩去刻，北方壬衽任入，凡四字一紐。或六字総帰一入：皇晃璜鑊禾禍和，光広珖郭戈果過，傍旁徬薄婆潑被，荒恍侊霍和火貨。上三字，下三字，紐属中央一字，是故名為総帰一入。…」（平上去入を四方に配すると，東方は平声［以下，“平上去入”の各字に相配する同声母の字を挙げる］，以上は全て四字で一つの紐［声調以外は同音の四声の組］である。また，六字がすべて一つの入声に帰着する［例は］，皇晃璜……。上三字と下三字は紐［同音異声調字のグループ］が中央の一字に属すので，“すべて一つの入声に帰着する”と称するのである。）とある。“四字一紐”のうち去声の挙例や，“六字総帰一入”からすると，入声は同部位の韻尾をもつ陽声ばかりでなく，同じ母音をもつ陰声とも対置されうるのである。これとほぼ同じ趣旨の論述は『悉曇蔵』巻二にも『四声譜』からの引用として見え，これは四声説の提唱者である沈約の『四声譜』と同一書であるか，少なくともその流れをついだものであろう。

このような理解を背景とすると，薛韻より後の入声韻は次のように平上去声と相配している可能性が生じる：

蕭	宵	肴	豪	歌	麻	覃	談	陽	唐
eu	iɛu	au	ɑu	ɑ	a	ʌm	ɑm	iɑŋ	ɑŋ
錫	昔	麦			陌	合	盍	薬	鐸
ek	iɛk	ɐk			ak	ʌp	ɑp	iɑk	ɑk
16	17	18			19	20	21	27	28

16錫韻から19陌韻は，『広韻』では相配する平上去声韻の韻目と異な

る声母をもつことになるのに対し，このように『切韻』本来の順番に相配させていくと，錫昔と蕭霄，陌と麻などは韻目が同声母となる。合盍が覃談，薬鐸が陽唐に相配することは問題なかろう。

しかし，22洽から26緝までは依然として浮いたままである。洽狎葉怙緝が咸銜塩添侵に相配することは韻目が同声母になっていることと音価からして間違いないであろう。そこで，これらの韻では入声の韻序が本来のものであり，むしろそれと相配する平上去声の方が何らかの理由で順を入れ替えられた可能性が考えられる。即ち，ある先行韻書または陸法言『切韻』のある段階の原稿において，咸銜塩添侵の各韻が談韻と陽韻の間に入っていた（相配する上去声も同じ）とするのである。このように舒声の側の韻序を組み替えると咸摂の所属韻が一二三四等の順に並ぶことになって他の摂の摂内の韻序との平行が得られて好ましい。これは今後更に検討するに値いする仮説だと思う。

なお，韻図の中にも入声を陰声にも配する一派がある。『七音略』は転次が陸法言『切韻』系の韻序に従っており，この点，李舟『切韻』系の韻序に従う『韻鏡』よりも古い特徴をもっているが，そこでは薬鐸韻が宕摂だけでなく效摂にも配されている。また時代は降るが，『切韻指掌図』では全書を通して入声が陽声と陰声に共に配されている。これらは『四声譜』流の理論に従って四声相配を行っていることになる。

五

梵字の摩多の順によったと思われる『切韻』の前三分の二ほどの韻序はどの先行韻書に由来するものであろうか。

王仁昫『刊謬補缺切韻』の系統に属す王一・王二・王三では各巻の冒頭で韻目が一覧されているが，その下に『切韻』序で言及されている五家韻書における韻の分合状況が注記されている[16]。その中で，广韻と厳韻の下の「陸無此韻目，失。」や範韻の下の「陸無反，取凡之上声，失。」は王仁昫のものであろうが，それ以外の注は例えば「皆——呂陽与斉同，夏侯杜別，今依夏侯杜」「魂——呂陽夏侯与痕同，今別」など

という表現なので，韻の増加を二韻しか行っていない王仁昫によるものではありえず，『切韻』193韻を定めた人——陸法言（ら）——に由来するとしか考えられない[17]。またこの注は王仁昫『切韻』以外の系統のTIV70＋71，S6156にも断片的に見える。

この韻目下の注記が現在の問題に対して解決の手掛りを与える。即ち，呂静・夏侯詠・李季節・杜台卿に関する注記は全体にほぼ満遍なく現れるのに，陽休之の注記だけは談韻を最後にして，その後の韻には現れなくなるのである（相配する上去入声も同じ）[18]。それ以前の平声では陽休之はほぼ全ての韻に関して言及されており，上声・去声では言及がかなり少ないものの，言及のある場合，韻の分合状況はほぼ平声と同じである。入声では沃韻に燭韻と同じである旨の注があるだけで，何故かその後には全く言及が見られない。この特異な分布によると，『切韻』の唐韻以前の梵字摩多の順に従う部分の韻序は陽休之の『韻略』によっている蓋然性が高い。

陽休之（509-582）は右北平無終（河北省薊県）の人で，『北斉書』巻42，『北史』巻47に伝がある。“能文能詩陽休之”と称せられていたといい，音韻関係の著書としては『韻略』（『隋志』では一巻とされている）の他，『新唐志』に『辨嫌音』二巻が著録されている。『韻略』の佚文は『小学鉤沈』や『玉函山房輯佚書』に十条ほど見えるが，かなり詳しい義注がついていたことが知られる。また，空海『文鏡秘府論』天巻には，「斉僕射陽休之，当世之文匠也。乃以音有楚夏，韻有訛切，辞人代用，今古不同，遂辨其尤相渉者五十六韻，科以四声，名曰『韻略』。制作之士，咸取則焉，後生晩学，所頼多矣。」（斉の僕射・陽休之は当代の文章の巨匠である。発音には地方的なものと標準的なものがあり，押韻にはなまったものと適切なものがあり，詩人が歴代に則ってきた［押韻法には］時代の差異があることから，ことに混同しやすいもの56韻を区別し，四声によって分類して，『韻略』と名付けた。作詩をする人は皆ここに範をとり，若い学生はこれに頼ることが多かった。）とある。これによると，陽休之『韻略』は混同しやすい韻だけ

を挙げたもので，56韻とは四声を通しての数であったであろう[19]。いま王韻などの韻目下注には27韻に対する言及が見える。この韻目下注は『切韻』の分韻に係わる場合にのみ言及がなされ，しかも必ずしも網羅的ではないから，この数字が『文鏡秘府論』に記載されている韻数の過半に満たないのも不思議ではない。顔之推が『顔氏家訓』「音辞篇」で「陽休之造『切韻』，殊為疎野。」と評するのは，一つには押韻基準や基礎音系が異なっていたことによるだろうが，いま一つにはそれが全体の韻を覆うものではなかったためであろう。このことは，しかし韻目下注において後三分の一の部分で陽休之に対する言及が現れなくなることとかえって符節を一にする。

以上をまとめると，『切韻』の前三分の二ほどの韻序は主に陽休之『韻略』により，東韻などからなる通・江摂を冒頭に置く点は呂静の『韻集』により，その他は陽休之『韻略』以外の先行諸韻書によって韻序が定められたわけである。『切韻』が六朝韻書を総合して成立したとする考えは既に繰り返し主張されているが，韻序においてもそれが窺がわれることになる。

六

最後に，摂の内部での韻の配列の問題を簡単に論じておこう。

まず，蟹摂は斉（四等），［祭（三等）］，佳皆（二等），灰咍（一等）となり，等韻学の用語で言うとほぼ四三二一等の順に並んでいる。蟹摂は梵字摩多の e, ai に相当すると見られ，このように前舌母音から奥舌母音の順をなすのは e, ai の順をなぞったものであろう。梵漢対音では，e は斉韻や皆韻，ai は咍韻字によって音訳される傾向がある。效摂は蕭霄肴豪と完全に四三二一等の順になっている。これも，梵漢対音では au にはふつう豪韻字が当てられるから一等韻が最後に来るのは理解でき，效摂も蟹摂と同じく前舌母音から奥舌母音の順に従って韻を配列したのであろう。梵漢対音では o にはふつう模韻字が当てられるが，『切韻』では模韻は魚虞韻と一群をなし，むしろ u, ū に相当するものとして扱われている。

一方，山摂は一二四三等，梗摂は二三四等の順になり，咸摂は入声韻の韻序に従えば一二三四等の順となる。これらの摂の内部の韻序が蟹・效摂と逆になって差異を見せるのは，梵字摩多に対応する音がないので制約を受けなかったためだと考えられる。

そのほかいわゆる内転系の摂では，三等韻が前，一等韻が後ろに置かれる傾向がある。遇摂・臻摂・宕摂・流摂・曽摂などがそうである。これは介音も含めた韻母全体の調音から見ると，蟹・効摂と同じく前舌から奥舌の順となる。通摂や止摂の摂内韻序の排列原理はよくわからない。止摂などは所属字数の多い韻を先に掲出している可能性も考えられる。これらの問題は『切韻』の分韻過程の解明をまって始めて全面的な解決を得るであろう。

注

（1）「切韻韻目次第考源」『北京大学学報（人文科学）』1957年4期。

（2）遠藤光暁「敦煌文書P2012「守温韻学残巻」について」『青山学院大学論集』29，1988年，第2節を参照。

（3）「中古中国語の内外について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』11，1958年。

（4）「切韻系韻書における韻の排列について」もと1970年，『中国語音韻史の研究』所収，創文社，1980年；「漢字の音韻」『中国の漢字』（『日本語の世界』3），中央公論社，1981年。

（5）『大正蔵』84，383頁。下の引用文では韻目下の反切は省略する。侯は原文では俟となっているが，反切からしても侯とすべきである。『大日本仏教全書』旧版30巻，新版42巻所収の1085年写本は文韻を春韻の前に置く他はほぼこれと同じである。

（6）『韻鏡考』，もと1924年，勉誠社文庫41，1978年，16頁。

（7）頼惟勤「声調名としての五音」『中哲文学会報』1，1974年などを参照。

（8）張世禄『中国音韻学史』（もと1938年，台湾商務印書館，1975年，上冊，168頁）や趙誠『中国古代韻書』（中華書局，1979年，10頁），周祖謨『唐五代韻書集存』（中華書局，1983年，下冊，808頁）などはこの「諸部」を韻部と解釈する。しかし，『封氏聞見記』のこの記述の直前には許慎の『説文』が540部であることが見え，直後には呂忱の『字林』も540部であり，「諸部皆依『説文』」と述べられているから，この「諸

部」の意味が部首であることは明らかである。ほか『封氏聞見記』には沈約の『四声譜』や『切韻』などに触れた「声韻」の項が他にあるのに，李登『声類』が「文字」の項で言及されていることにも疑問が提出されている。これは，四声説に基づく韻書のイメージからすると，五声説によった『声類』は封演にはむしろ字書に属するものと感じられたのであろう。佚文から見ると『声類』には義注がかなり詳しくついており，その点で原本『切韻』とは異なる。なお，輯佚書によると呂静『韻集』・李概『音譜』・陽休之『韻略』などにも詳しい義注がついていたことが分り，これらのような字書的な性格を兼ねた韻書が陸法言『切韻』に至って純粋な形の韻書に変貌を遂げたことになろう。

(9) 以下『文鏡秘府論』を引用する際は興膳宏氏訳注の『弘法大師空海全集』第5巻（筑摩書房，1986年）所収による。訳は興膳氏の訳注と注7所引頼論文を参考にしつつ付けた。なお，この箇所は隋の劉善経『四声指帰』から引用された「四声論」の一部である。

(10) 王応麟『玉海』巻7所引。王国維「五声説」（『観堂集林』巻8所収）はこの説を非とするが，王国維の提唱する五声が李登らの五声説の「宮商角徵羽」と一致する保障はない。

(11) 『広韻』では山韻以前が上平，先韻以下が下平として分巻されており疑点はないが，唐代の切韻系韻書ではかえって奇妙な扱いが見られる。まず，完本王韻では巻首に「巻第一　平声五十四韻」とあり，続いて平声54韻の韻目が一覧される。ところが，上去入声では巻頭と巻末が表示されるのに，平声では巻一の終わりと巻二の始めは表示されず，平声54韻の末尾に「巻第二尽」とある。もし平声を分巻しないのが正しいならば，「巻第二」とあるのはおかしい。しかし『切韻』が五巻であるのは「序」や歴代の書目の記載からしても疑いのないところで，原本では平声が二巻に分かれていたとしか考えられない。完本王韻は巻二の下平声の韻目の一覧表を巻一に移し，巻二を巻一に続けて書いたためにこのような矛盾が生じたものであろう。また，先韻以下の残っている本の内，S6187，P2011（王一），王二，王三（完本王韻）P2014（刊）では平声全体で通し番号が付けられており，先韻から新たに番号が始まるのはわずかにS2071（切三）のみである。しかし，これはむしろ韻の通し番号が陸法言に遡るとは限らないことを示すだろう。

(12) 唐蘭「唐写本王仁昫刊謬補缺切韻・跋」（もと1947年，広文書局，1964年）は「蓋宮商実指韻部，宮者東冬，商者陽唐，角者蕭宵，徵者咍灰，羽者魚虞，創始者粗疏，故但列五部耳。」という。また注7所引頼論文は宮商角徵羽の五音が，商を除くと宮＝通摂，角＝江摂，徵＝止摂，

羽＝遇摂となり，『切韻』の冒頭の韻序に合致すると述べている。

(13) 『古今韻会挙要』巻頭の案語に引く『七音韻鏡』の説や注3所引論文57頁16－18行なども参照。

(14) 『切韻』「序」に「古今声調既自有別」とあるのは，五声説（古）と四声説（今）の違いを指すものと考える。陸法言には過去の時代の声調調値を知る手段はなかったのだから，四声の調値の歴史的な違いを意味することは有り得ない。

(15) 魏建功「切韻韻目四声不一貫的解釈」『北京大学学報（人文科学）』1958年2期はすべての韻目についてこのような検討を行っている。相配する平上去入の韻で同じ声母の韻目が用いられていない場合は，対をなす隣接韻のどちらかに当該声母字がないことが多い。例えば，東韻と冬韻に相配する去声では，宋韻に端母の字がないため“宋”韻となり，送韻は端母字があるにもかかわらず宋韻と声母を合わせて“送”韻としている。これは四声相配の関係を示すよりも，同声調の近似韻との間で韻目を同声母に揃えることを優先したことを示す。これは現代流に言うと近似韻との間でミニマル・ペアーを作って分韻を正確に決定する必要があったからであろう。

(16) それらを校定して一覧表にした周祖謨「切韻的性質和它的音系基礎」『語言学論叢』5，1963年，第2節を参照するのが便利である。

(17) 注4所引尾崎1981年文，145頁参照。

(18) ただし談韻の注には「呂与銜同，陽、夏侯別，今依陽、夏侯」とあり，52銜韻に関しても触れている。後世にいう咸摂は『切韻』では3か所に分断されており，談韻と銜韻は間に宕梗流深曾摂などの15韻に隔てられているが，前節で入声と舒声の相配について論じた際に示唆したように談韻の後に咸銜…韻が続いていた先行韻書が存在した可能性があるから，平声のほぼ末尾にある銜韻に対する言及があるからといって陽休之『韻略』が全韻を覆うものであったとする必要はない。

(19) 王韻などの韻目下注に言及のあるものだけによっても陽休之の韻数は平声で『切韻』（54韻）より12韻少ないから，小西甚一『文鏡秘府論考』研究篇上（大八洲出版株式会社，1948年，63頁）の如くこの56韻が平声韻を指すものとすることはできない。

追記

銭大昕「韻書次第不同」（『十駕斎養新録』巻5）は『千禄字書』（や『古文四声韻』・『七音略』など）において覃談韻が陽唐韻の前に置かれ，蒸（登）韻が塩（添）韻の後に置かれていることに既に注目している。ただし，これが即ち陸法言『切韻』系の韻序であるとはさすがにまだ言っていない。